

博物館だより



博物館休館日カレンダー
2025年 9月

日	月	火	水	木	金	土
31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	1	2	3	4

休館日 ※情報はR7.8.19現在

No.226

令和7年9月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆博物館NEWS

常設展示紹介「その1」

「吉田増蔵と 昭和100年」

今年は昭和元年(1926)から数えて100年目の節目の年にあたります。

当館では、この「昭和」の元号考案者である吉田増蔵(みやこ町勝山上田出身)に関する資料を常設エリアで展示するとともに、ホールの特設コーナーでは吉田増蔵を紹介するパネルや「昭和」を感じさせる家電や日用品などの懐かしいグッズを展示しています。



▲ホール特設コーナーのパネルとグッズの展示

常設展示紹介「その2」

「吾輩は猫である120年」

夏目漱石の小説『吾輩は猫である』は、明治38年(1905)1月に雑誌『ホトトギス』で発表されてから、今年の1月で満120年を迎えました。

当館には漱石の一番弟子の小宮豊隆(みやこ町犀川久富出身)の資料が常設展示されていますが、その中には『吾輩は猫である』にちなんだ漱石直筆の貴重な資料も含まれます。



▲漱石直筆の「猫耳似顔絵」書簡の展示

特に漱石が小宮に宛てて書いた「猫耳漱石の似顔絵」が描かれた手紙は必見です。博物館ではこのイラストを元に製作されたグッズも展示しています。

なお、東京都新宿区の漱石山房記念館では、10月11日から12月7日にかけて120年記念の特別展が開催されます。

◆講座・教室・催し物ガイド

9月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

9月6日(土) 9時30分～

【古文書講座】

9月13日(土) 10時～

【古典かな講座】

9月20日(土) 9時30分～

【みやこ学講座】

休講します。

※日程等変更となる場合があります。

◆会員募集！

みやこ町博物館友の会

みやこ町歴史民俗博物館友の会は、今年で創立30周年を迎え、10月には記念行事を計画中です。

例年11月にはバスハイク、12月には国分寺三重塔すす払い、2月には三重塔まつり参加など、楽しい活動が盛りだくさんです。

会員登録は、博物館窓口へ！



▲受付横の漱石関連商品の販売コーナー

7月・8月の業務日誌から

7月17日(木)、豊津平成学級が博物館で開催されました。受講生の皆さんは、みやこ町の歴史について、当館学芸員の解説に熱心に耳を傾けていました。

8月17日(日)に閉幕した「福田安次氏と『平和の木』たち展」に沢山の方がご来場下さいました。今年の「平和宣言」でも言及された、被爆樹木を後世に伝える活動を、今後も皆で継承していきましょう。



▲交流の歴史を通して平和の尊さを学びました。



▲豊津地域の歴史を詳しく学ぶことができました。

みやこの歴史発見伝 180

米の歴史と文化

米をめぐる環境の変化

今年も稲刈りの季節を迎えました。米の品種にもよりますが、一般的に田植えから稲刈りまで100日以上の日数がかかるといわれ、この期間、水の管理や除草、病害虫防除など多くの作業が伴います。今年の田植えの時期には、米価の高騰に伴い初めて備蓄米の大量放出が実施されました。さらに今年は「梅雨明け」が早く、8月上旬には40度を超える歴史的な猛暑が続き、各地で水不足や稲が枯れるなどの被害が続出しました。8月5日には、国から米の生産調整（減反）を見直し米の増産に転じる方針が示されるなど、今年の田植えから稲刈りまでの期間に、米をとりまく環境に大きな変化がみられました。今回は、みやこの史跡を中心に、お米の歴史と文化についてご紹介します。



エノヲ遺跡付近の稲刈り風景
(みやこ町勝山黒田)



エノヲ遺跡出土石器
(左が武器、右が刈取り道具)

「稲作」と「戦争」のはじまり

昨年の「令和の米騒動」から米の価格が高騰していますが、同時に、改めて米が「日本の主食」であることを再認識するきっかけになりました。世界的にみて主食の大部分を占めるのが米、小麦、大麦、トウモロコシ等の穀物で、これに次いでジャガイモなどの芋類や豆類など、炭水化物が豊富な作物が選ばれています。

日本で最も重要な作物とされる「五穀」は、地域や時代によって異なりますが一般的に「米、麦、粟、稗、豆」を指したもので、古来より日本の祭りで祈願される「五穀豊穡」とは、これらの穀物が豊かに実る祈りを込めたものです。町内にある約3000年前の節九西遺跡では、ドンギリなど「採集」された「木の実」が当時の主食であったことを裏付ける痕跡が伺えます。その後、米が中国や朝鮮半島を経由して日本に伝えられたとみられますが、町内のエノヲ遺跡

(勝山黒田) や犀川小学校校庭遺跡(犀川本庄) で約2000年前の稲粒が出土していることから、みやこ町でも、この頃には稲作が行われ米が食べられていたと推察されます。当時の米は一粒の籾種から約400粒と比較的に多くの収量があったとみられ、さらに保存がきき、何よりも木の実と比べて「おいしい」ことが国内各地へ稲作が展開した最大の理由とする見解もみられます。それまでの「採集」とは異なり、稲作は平坦な土地や水を供給する川など稲作に適した土地が不可欠です。稲作の開始により、これらを巡って村落や地域間で争いが発生したとみられ、前述の2つの遺跡でも石庖丁や石鎌といった「収穫の道具」と併せて、石製の剣などの「武器」が出土しています。約2000年前に発生した米を巡る地域間の争いを以て、日本の歴史上「本格的な戦争の開始」とする研究者の見解もみられます。食料の「採集」から「生産(栽培)」への変遷は、食料の安定供給と同時に、現在まで続く「戦争のはじまり」となり、世界各地にみられる国家の成立過程で同様の傾向を確認することができそうです。

豊前国府(みやこ町国作) が設けられた奈良時代以降、米は重要な税として国の政治・経済を支える重要な基盤となります。農民は収穫した米の多くを税として納めなければならず、日常的に食べられるのは「五穀」に含まれる粟や稗などであり、米を食べることが

できたのは祭などの「特別な日」のみでした。地域によって異なりますが、現在のように米を毎日食べるようになったのは、戦後の高度経済成長期前後とみられ、米の消費量は昭和37年(1962)の一人あたり年間118.3kgがピークで、今年(2025)は半分以下の51.5kgまで減少しています。白米や寿司の酢飯のことを「シャリ」と呼びますが、これは仏教用語でお釈迦様の骨粒(仏舍利)を指すもので、米を減多に口にすることができなかつた時代に、お米粒に対する日本人の心情を反映した言葉として注目されます。

藁も貴重な資源

稲刈りの際、脱穀後の副産物として生じるのが「藁」です。現在、稲藁の8割以上は、稲の刈取時にカッターで細かく刻まれて撒かれ、その後、鋤き込まれています。飼料としての利用も1割程度に止まりますが、現在バイオマスエタノールなどの新たな利用法も試み



ムシロ編みを再現した人形
(有馬美和子氏製作)

られています。稲刈りは当初、エノヲ遺跡等で出土している石庖丁などを使った「穂摘み」が一般的でしたが、切れ味の良い鉄製鎌の普及によって、稲株の基部から刈り取ることが可能になったことから、形の整った稲藁を大量に確保できたため、その利用用途が拡大しました。稲藁は、昭和30年頃まで薪の焚き付け燃料、家畜の敷き藁、飼料、堆肥、断熱材、藁葺屋根材等のほか、国内にみられる各種工芸品の材料など貴重な資源として利用されてきました。特に農家では、冬などの農閑期に「藁仕事」を行い、縄、蓑、草鞋、ほうき、俵、カマス、ムシロなど様々な藁製品が作られています。これらは貴重な現金収入となりました。

経済・文化の基盤を構築

このように、米は単なる空腹を満たす食料だけではなく、2000年以上にわたって日本人の生活や経済・文化の基盤を構築し、各地の信仰や民俗にも大きな影響を及ぼしてきたことが確認できます。

温暖化に伴う異常気象により、米の生育環境が大きく変化する中、高温の耐性を持つ米の品種改良などの研究が行われています。現在、米をとりまく環境はめまぐるしく変化していますが、先人が工夫や努力を重ねて2000年以上も大切に守ってきた、かけがえのない食文化をこれからも大切に未来へ伝えてゆきたいものです。

(井上信隆)